

(又は眼徑對體高)との間、體高對體長と眼徑對頭長との間には有意の差のあることが5%の危険率で認められた。

兩棲類に於ける前腎管の發生について 新池 保 (大阪齒科大)

イモリの第20期乃至第27期の胚を用い、局所生體染色、除去、移植等の諸實驗を行い、前腎管原基はその全長にわたり局所的に生ずるという結論を得た。實驗例中、生體染色に關するもの二・三を擧げる。第21期胚の體節3・4及び8をその腹側中胚葉と共に夫々中性赤、ナイル青で染めて置くと前腎管のうち體節5・6・7のものは赤く、體節8以後のものは青く染まる。第21期乃至第25期胚の體節3・4とその腹側中胚葉(前腎原基)とを染めて置くと體節數節と前腎管の大部分とに色素が見られる。第24,25期では前腎管原基は既に存在しているのであるから、染色部の伸長は必ずしも原基の伸長を意味しないことが分る。O'CONNOR('38),小川('43)はかかる色素の移動を直ちに原基の自主的伸長と見た。染められた前腎管原基或は前腎管に、同時に同様に染められた他の組織よりも後方まで色素移動の見られるは、之等の組織細胞の特殊性によると考える。

(問)前腎の前部を染めた時、着色部が後方に伸びる様に見えるのは、色素が腎管中に排出されて流れるのか、それとも他の理由によると考えられるか。(中村治)(答)少くとも第40期前後までの胚では、色素の排出は見られなかつた。(問)胚の後部を染めた場合に、發生が進んだ時に染つた組織を最初に染めた組織が増殖したものと考えるならば、前部を染めた實驗でも、染色部位は最初に染めた組織が伸長したと解釋すべきではないか。(中村建兒)(答)胚の種々なる時期に種々なる位置を染めて見た結果を比較して、色素の前腎管に沿う伸長は、成長に伴う管自身の伸長にも關係があるが、主として色素の細胞から細胞への移動と解釋する。(問)前腎原基を移植した場合、前腎輸管がそれから延びて行くが、それと本講演で認められた事實との關係を如何に考えられるか。(山田常雄)(答)原基を自由な位置に移植すれば延びるが、それにも或る限度があり、自然の位置では尙更に制限され、前腎原基が伸びて前腎管全部を作るといふ意見には賛成出来ない。

キムラグモ (*Heptathela kimurai*) の發生 吉倉 眞 (熊本・理・生)

原始蜘蛛キムラグモの發生を觀察し普通蜘蛛のそれと著しく異なる點を發見した。(1)胚發生中特に反轉期を認め得ず。腹板一端に生ずる二次肥厚即ち腹部突起はその體節を増加しつつ漸次腹面前方に折曲りのびゆく。なお胚體節は左右に分離せず。(2)はじめ第1—6腹節に夫々1對宛肢狀突起を生ずるが、腦溝閉鎖期に及び第1,第6節のそれは消失する。この頃腹部に12節を數う。(3)糸疣は第4,第5節兩腹節の肢狀突起に起原するが、發生中内外2枝に分れることなく孵化する。孵化後2,3日にして脱皮せる幼蛛には興味あることに第4,第5各腹節に夫々2對宛即ち8糸疣をみる。*Liphistius*は8糸疣を有するに本種は7糸疣を有す。これ岸田久吉氏が新屬 *Heptathela* を設けられし所以)。産卵期は6,7月。發生過程は核の卵表分散期、産卵後約5日。腹板形成に次で頭胸部分節期、約15日。腹肢出現期、約20日。腦溝閉鎖期、約24日。かくて約1ヶ月を要して孵化する。

イエコウモリの發生學的研究 II. 卵成熟から受精まで 内田照章 (九大・農・動)

冬眠期中、靜止期にあつた卵は覺醒後、成熟分裂前期の分散期に入り、第一・第二成熟分裂及び前核の形成・接合の過程は、一般哺乳類のそれと同一である。グラフ細胞は特異な状態を示し、卵は常に厚い corona 細胞に取りかこまれて排卵され periovarian space で受精される。前核の形成期乃至接合期にある卵の過半数が、尙完全に corona 細胞に取りかこまれている所から、少くも本種の生體内に於ては、精子による corona 細胞の破壊・消散は受精の不可缺の條件ではなく、個々の精子の hyaluronidase の局在によつて、精子の厚い corona 細胞の通過は助けられ、精子はこれを穿入するものと考えられる。排卵期は4月下旬、黄